

宿命の交わる城



宿命の交わる城 / *Il Castello dei Destini Incrociati* (1973) / イタロ・カルヴィーノ (河島英昭訳) / 講談社 (6/28刊・¥1,300)

とある森の中の城に、一夜の宿を求めた人々が集う。人々は、数奇な体験の中で、言葉を失い、ただその場に置かれた、タロット・カードを手に、物語を伝えようとするだけである。

カードの一组は、ヴィスコンティ家の豪華な細密画であり、もう一组は、一般によく知られる、素朴な古マルセイユ版のデッキである。その七十八枚のカードが、いっばいに展開され、一枚ずつの絵が、物語を自ら語っていく。絵の解釈は、本来のタロットの意味とは、かなり違っている。作者カルヴィーノが、幾何学的に縦横に走る物語の構造に、カードを触媒として封入したためである。

物語のはじまりである一枚のカードが、別の物語では終わりのカードとなり、ある人物にとっての幸福が、別の人生での不幸の兆しとなる……。

“虚^{うつろ}な物語”と作者自身が述べた『見えない都市』同様に、読み手は、そこに無数の物語を、人生を、見てとれる。

そういう点で、本書は、(いい意味での)カードのノヴェライゼーションとみなすことができるだろう。(俊)